

2018.12.01

関上巡検の感想

東日本大震災の津波被災地域にある沿岸部施設「関上の記憶」、日和山神社の津波の痕跡と荒浜小学校校舎の遺構を訪問し、当時の状況を語り部の方から聴講したり、校舎内の状況等を見せていただいたところです。

大震災の被害や犠牲を後世に伝えたという被災地での語り部の方々の話は、涙を伴う言い知れぬ思いを感じました。このような伝達方法は、大昔から人々の間で行われ、それが地域の災害文化や伝承となり、伝えられてきたし、生活の礎になってきたものと思います。大規模自然災害は、頻繁に起きるものではありませんが、起きれば想像を絶するものになるわけで、その長いスパンを継続して伝えていくことは大変なことです。それを支えるのがコミュニティということになるわけで、自然災害はいつか必ず来るものであるという共通の認識が、同時に互助を主にした日常の安全、安心な環境を支えているということになると感じました。

したがって、語り部の方自身も、状況報告だけでなく被災前と未来への伝言が期待されていて、我々いま生きているものが、未来へなにを託すべきなのかを考えるためのヒントを得ようとしているのではないのでしょうか。

自然災害は、いつ来るかはわかりませんが、繰り返し来る環境は間違いがなく、被害はより弱いところをついてきます。そのために、地域にどのような災害に対する弱点と強みがあるのか強みを知っておくことが、大変重要になります。

地域を知るということは、何を知るのかということになります。地域にはたくさんの方がいます。大事なことは、いままで何がおきたのか、起きているのかということです。記録の文献は欠き、最近のことしかわかりませんが、地形や地質は過去にどのようなことがあったのか教えてくれますので、両方を合わせながら、地域の性質を知ることになります。災害に対して、完璧な対策はできませんが、最小限の備えは、正しい知識、日常から関心を持って災害に対して感度を上げるということです。よその地域での災害に対しても、ただの報道だと思わずに、自分たちのところで起きたときにどのようなことができるのか、すべきなのかをシミュレーションするということが学習することも大切なことになります。加えて、災害は結果的には弱いところが責められるわけで、事前にどのようなところで何がおきているのかを把握しあって、地域防災を高めていくことが求められます。

それから、情報の取り扱いを適切に取捨選択、評価できるようにしておくことも必要で、情報を適当に都合よく判断したり、逆に自分は大丈夫ということだと、避難が遅れたり、二次被害や余震で大きな被害を受けたりすることがあります。それこそ、防災は関心を持つことが大事で、ポーとしていてはだめだということになると思います。

復興は災害が発生して、元の暮らしに戻るということが最大のテーマですが、なぜ、被害範囲を非居住区域にしたのでしょうか。ここで、仙台平野（宮城野平野）に限ってみると、津波は東部道路と称する高盛土の道路がバリアーになって、そこから海岸までの広い範囲

が津波浸水域になりました。この地域は大都市仙台の食糧基地として肥沃で温暖な気候を活用しての農業基地でした。確かに、今回の津波を考えると危険なところということになりますが、非居住地域とする以外に方法はなかったのでしょうか。堤防のかさ上げなどでは、専門家が指摘されている予想高に対応したものになっているのでしょうか、経験値を MAX にした復旧的な考えはどのようなのでしょうか？極端な言い方ですが、被害を受けた地域だからこそ、次世代へ向けて知恵を出して対応する防衛策を案出しなかったのでしょうか。復興は 0 か 100 しか方法がないのでしょうか。例えば、避難方法を高度化して、今回の被災区域の再興を図るということができなかったのでしょうか。いまの IT 技術を駆使して、避難タワーやペDESTリアンデッキのようなものを設置するというのも選択できたのではないのでしょうか。津波は、地震発生とリアルタイム（閉上では発生後 1 時間 6 分後だそうです）では襲来しないわけで、この時間差を活用するという方法もあるし、より確実な情報の収集と迅速化も不可能なことではないと思います。もちろん、防災は人、モノ、情報の三位一体が重要ですので、その底上げが政策として望まれるところです。別に、危険なところ、被災区域にただ戻れと言っているわけではありません。今回のような復興の考え方では、津波対策が万全であるというような妄想を生み出してしまうことこそ要注意だと思います。被害のあった箇所は避けるということが唯一の安全策ということは、先人が自然災害と対峙した知恵を放棄したかのようにも感じます。確かに、高台移転、被害地域の非居住化だけを見れば、津波の被害を受けることはないでしょうが、そのために失ったものはないのでしょうか。

被災地域をみると、土木的には復興が進捗している様子はいかがえましたが、あの松林がなくなっていて、空き地にはセイタカアワダチソウなどを見るのは、なんとも寂寥の感がいっぱいでした。

昼食の閉上名物シラスの釜揚げ丼を食べながら、語り部の方の話は単なる記念スポット的なものではなかったなと考えさせられる日だったように感じました。

(2018.12.01 記)